



集広舎

# ソノソノ一直線

久留島武彦記念館館長 金成妍 (まよ、ソノソノ) 聞き書き

西日本新聞社 鶴丸書籍

【書評】鶴丸哲雄著『ソノソノ一直線』久留島武彦  
記念館館長金成妍聞き書き 集広舎 A5判 一二四ページ  
定価二〇〇〇円十税

主人公金成妍氏(一九七六年に釧路生まれ、西三十三歳)は、現在大分県玖珠町の久留島武彦記念館館長。九州大学大学院で文学博士号を取得している。そして久留島武彦文化賞、日本児童文学会奨励賞、巖谷小波文芸賞・特別賞を受賞している。いずれも受賞者としては最少で外国人としても初めてという。

本書は福岡市のブロック紙『西日本新聞』に令和三年二月から九十九回にわたって連載された聞き書きを上梓したもの。「聞き書きシリーズ」として取り上げられる主人公としても最年少だという。

本書の内容を以下に挙げておく。口絵、プロローグ、I 久留島武彦に出会う 旅、II 久留島武彦と口演童話活動、III 越境する文学、IV 故郷、V、留学生、VI 玖珠町に、VII 久留島武彦研究所、VIII 開設目指して、IX 晴れの日、X 開館その後、エピソード、あとがき。

主人公は留学生だった九州大学大学院生時代、恩師・花田俊典教授から渡された久留島武彦(一八七四明治元年一九〇〇昭和三年)の本から、あまり知られていなかった彼を知り、日本のアンデルセンと呼ばれる口演童話家で、韓国でも口演童話の語りを広めたことなど、当時の日韓での新聞を徹底的に調べて年譜を作成することから研究を開始。幼稚園開設や英語が堪能だった彼がボーイスカウト指導で欧米に通訳を兼ねて渡ったこと、巖谷小波との親交などを調べ上げ発表したことが縁で、第48回久留島武彦文化賞を受賞。彼の出身地の玖珠町でも彼の名が知られていない実態に「何とか周知徹底しなければ」と決意し、同町で久留島学講演会を重ねるなどをした結果、町としても久留島武彦研究所を作り、その所長に招かれたり、やがて出来た久留島武彦記念館の館長に収まるべくして収まった経緯が本書によって納得させられる。

筆者も久留島武彦像建立にあたり、同賞受賞者の一人として、募金に応じたことから除幕式に参加。金成妍館長とお会いしたが、このときはなぜ韓国の人が館長なのだろうかと疑問に思ったことも確かである。しかし、本書によって明快にその回答を得た。

聞き書き担当の鶴丸哲雄記者(著者)のペンも冴えている。好奇心の塊である主人公は、書名のように直ちに行動を起こし解決しなければ気の済まない性格で、そこがまた面白い。そんな主人公の半生を綴ったこの聞き書きは、私たちに人としてあるべき生き方を暗示してくれ、爽やかな読後感を味あわせてくれるのである。(元島根大学法文学部教授)